
もうすぐ私は自殺する

風見 鶏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もうすぐ私は自殺する

【Nコード】

N9446B

【作者名】

風見 鶏

【あらすじ】

少女が自殺する話……………

(前書き)

悪いところがあれば言ってください。

批判してもいいですが、何が、どうダメか、具体的に言ってください。
い。

もっと、文章が上手になりたいんで、よろしくお願いします。

突然だが、私はもつすぐ自殺する。

いきなりすぎて、理解できないかもしれないが、私は自殺するのだ。

そのために、今、夜の学校の屋上に立っている。

では、なぜ自殺をするのか。

その経緯を説明しよう。

.....

私は、有名な私立女子中学校（今、私が立っている屋上の学校）の2年生だ。

そして、自殺をしようと思った理由が、いじめられていたからだ。

いじめの他にも色々理由があるのだが、一番の理由がこれだ。

元々私は、クラスではもの静かで、浮いていた存在だった。

ろくに遊ぶこともできずに、厳しい校則等で抑圧され、勉強しては

かりの彼女たちからすれば、私は恰好の獲物だったのだろう。

始めは、ただ無視され続けるだけだった。

元々、あまり喋らない私からすれば、これは、あまり苦にならなかった。

無視することに、効果がないことがわかると、彼女たちは、暴言、罵倒を吐き始めた。

正面から面と向かって言わずに、少し離れた所から、わざと聞こえるように言うのだ。

これも、あまり苦にならなかった。

暴言、罵倒なんて、慣れてしまえば、なんて事はない。

次は、物を隠したり、傷つけられたりした。

これは、さすがに困った。

辛かったとゆうよりも困った。

教科書はページが破られ、落書きだらけで、何が書いてあるのか、わからないし、体育の時には体育着がなくて授業が受けられなかった。

教科書や体育着は新しいものを買ったのだが、結局は同じことの繰り返しだった。

この頃になると、私もさすがに怒って、教員に言ったのだが、

「みんな、少しふざけただけだろう」

や

「おまえにも、何か、問題が、あるんじゃないのか？」

などと、言ってきた。

有名な、私立学校だから、いじめ等、学校の価値を低下させるものは、隠したいのだろう。

それはわかるが、何の対応もないのは、甚だしいにも程がある。

私は、無駄だとは思いながらも、親に言ってみた。

なぜ、無駄なのかと言うと、親は、私に、関心がないからだ。

小さい頃から、ずっとだ。

なにをしても、褒めてくれなかったし、怒ってもくれなかった。

私は、親の気を引きたくて、がんばった。

とにかく、色々がんばった。

有名な私立女子中学に入ったのもそのためだ。

だが、やはり、無関心のままだった。

そして、案の定、私が、いじめられていることに関しても、まるで興味を示さなかった。

誰も助けはくれなかった。

それでも、私は学校に行った。

このまま、学校に行かなくなるのは、負けた気がするからだ。

私は、負けるのが嫌いだ。

だから、学校に行った。

それが、おもしろくなかったのだろう。

私が、学校に行くと、机の中に手紙が入っていた。

私は、どうせ、いやがらせだろうと、思いつつも、その手紙を読ん
でみた。

そこには、こう書かれていた。

「謝りたいから、放課後、視聴覚室に来てほしい。」

誰がこんなものに引っかかるか。

私は、まず、そう思った。

だが、万が一とゆうこともある。

私は、考えた。

このまま、無視するべきか、行くべきか。

私は、行くことにした。

この手紙が、本当であることに賭けたのだ。

今、思えば、バカだったと思う。

あのときは、心のどこかで、いじめから解放されたいと、思っていたのだろう。

放課後になり、視聴覚室に行くと、彼女たちが待っていた。

2人が、私の方に来て、そのうちの1人が、私の手を引き、私を視聴覚室に倒した。

突然のことだったので、何もすることができなかった。

そして、彼女たちは私を囲む。

2人のうちのもう1人は、私の後ろにあった、ドアの鍵を閉めてたようだ。

この学校の視聴覚室は、中の音が、外に漏れないようになっている。

これで、私が悲鳴をあげても、視聴覚室にいる人たち以外は、何もわからないだろう。

やられた。

私は、そう思っていると、腹部を思い切り蹴られた。

「うっ」

自分でも、驚くぐらいまぬけな声が、出たと思う。

彼女たちは笑っている。

実に下卑た笑い声だ。

彼女たちが豚のように見える。

あっ、それでは、豚に失礼か。

「かはっ」

またしても、腹部に痛みがはしる。

彼女たちは、相変わらず笑っている。

調子がついたのか、彼女たちは、休む暇なく、私に暴行を加え続ける。

初めは腹部を集中して、蹴られていたのだが、徐々に顔も蹴られ始めた。

ここまでくれば、立派な犯罪だ。

だんだんと興奮してきたのか、

「死ねっ」

「消えろっ」

「くせえんだよ」

などと、暴言、罵倒を浴びせてきた。

興奮して頭が回らないのだろう。

同じことばかり、オウムのように、繰り返している。

満足したのか、彼女たちの暴行が止んだ。

その頃には、私の心は完全に折れていた。

イタイ

コワイ

ナンデ？

ナンデワタシナノ？

ダレカ・・・

ダレカタスケテ・・・

さっき言ったとおり、私は負けず嫌いだ。

だが、負けた。

私は、負けたのだ。

「また、遊んでやるよ」

彼女たちは、そう言うと、笑いながら去っていった。

もういい……

シノウ……

こんなにも、辛くて痛い思いは、もうしたくない。

今夜……

シノウ……

.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....

そうゆう経緯で、私はここに立っている。

さて、そろそろ死のうか。

私は心の中でそう呟く。

私は死ぬために、歩を進める。

あと、3歩・・・

あと、2歩・・・

あと、1歩・・・

あと、1歩で私は死ぬ。

生から死へ・・・

行くことはできても、戻ることはできない・・・

だけど、私は後悔しない。

あんな目にあつくらいなら、こっち側には、もういたくない。

そして、私は最後の一步を・・・
踏み出した・・・

落ちてゆく・・・

堕ちてゆく・・・

おちてゆく・・・

オチテユク・・・

そして、あと数センチ・・・

「あつ」

私の頭から血が流れてゆく・・・

即死で逝けると思ったが、そうもいかなかったようだ。

だが、時間の問題だ・・・

即死ではないが、出血多量で死ぬだろう・・・

頭もボウツとしてきた。

何も考えられなくなっていく・・・

そうして、私の意識は・・・闇へと消えた・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9446b/>

もうすぐ私は自殺する

2010年10月26日19時03分発行